

# 脱西洋中心主義的なグローバル研究はあり得るか？

## 10分で 自分のアイデンティティを 語ります

コーネル大学の大学院生と議論したことがあります。ユダヤ系アメリカ人でしたが、開口一番こう言いました。「先生、10分ください。自分のアイデンティティをぜんぶ語ります」。面白いと思ったので、話してもらいました。すると、ダビデに始まるユダヤ人の歴史から、ホロコースト、パン屋である父親の話、家族でアメリカに移住した経緯、そして現在の自分まで、みごとに10分で語り切ったのです。

この学生は、自分を言葉に置き換えていくトレーニングをつねに重ねているのだなと思いました。言葉にできないなら、自分は存在しないも同然と言わんばかりでした。翻って、日本人はどうでしょうか。

あなたは、「10分で自分を語れ」と言われて、すぐに滔々と「私」を語れますか。恐らくその準備は出来ていないでしょう。大事なことは言葉にしないものだとか口をつぐむかもしれません。

近代西洋文化では、明晰な「私」や「自分」の持つ意味が想像以上に大きいのです。西洋の考え方では、「自分自身」(self)は単一です。複数あるとすれば、その人は統合失調であるとか、子どもっぽいとか、混乱しているとか言われてしまいます。しかし、非西洋圏ではそうとは限りません。例えば英語では「I」1つですが、日本語なら「私」は性や状況によって「ボク」「オレ」「手前」「アタシ」……と変わります。「お母さんはね」「お父さんはね」と自分の子どもに声をかけることもあるでしょう。今ここに浮上していない潜在的な「私」も含め、複数の顔を持つ「私」をその都度使い分けていくのです。西洋言語ではmyselfは単数で、myselfsのような複数形はあり得ません。そうした西洋固有の「私」観念を非西洋文化に投影しても、理解はうまく進みません。

## 西洋の影響を受けた 「非西洋圏の近代社会」をどう語るか

私が専攻する人類学は西洋でつくられた学問です。当然、西洋の事象を説明する概念や論理に基づいています。そうした言葉や考え方をを用いて、主に「未開」と呼ばれた社会の調査研究が行われてきました。



現在の人類学では、中間的な社会の調査が中心になっています。中間的な社会とは、私の表現では「一定程度西洋化した非西洋圏の近代社会」のことです。日本や韓国、中国を含め、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、ときにはヨーロッパ周縁部にも、近代西欧の影響を受けながらも地元の価値観や行動様式を失わない社会が広がっています。こうした社会をどう語るか。今日、世界の人口の大部分を占めるこのような「非西洋圏の近代社会」を分析するのに、西洋発の学術言語や認識論が適しているかどうかは問題なのです。

こう考えるに至った背景には、30年ほど前から私が通うメキシコ南部の先住民

(インディオ)社会での経験があります。宗教(レリジョン)、アイデンティティ、セルフといった西洋が鍛えてきた概念を当てはめてみても、理解できないことがいくつもあるのです。

西洋の考え方では、宗教はその人の存在を根源的に形作るものです。しかし、インディオの友人にはカソリックからプロテスタントに改宗した者も多く、そこからイスラム教徒になって、ふたたびカソリックに戻ってきた者までいます。そこでは、宗教とは人間存在を規定するものというより、そのときどきの利害や関心に合っているかどうか問われるものなのです。それを、「レリジョン」という西洋の概念で分析してしまうと、その信仰歴からは「浅薄な人間性」しか浮かび上がってきません。

日本人もクリスマス、神社での初詣やお宮参り、仏式の葬式などを違和感なく生活に取り入れています。それをレリジョン概念で表現しようとすると、無宗教と言わざるを得なくなるかもしれません。

西洋が鍛えてきた学術言語に限界があるなら、どうしたらいいのか。そうしたことを考えるとき、西洋型の近代教育を受け、かなり西洋化した日常生活を営み、しかも非西洋圏の文化にも相当深く根差す私たち——複数の文化を内側に持つが故に、西洋の学問を外から眺められるかもしれない私たち——の存在意義があると思います。

## 人類学の本質は エスノアンソロポロジーにある？

先日、世界24大学の研究者が東京に集まり、「グローバル・スタディーズ・コンソーシアム」のシンポジウムが開催されました

(<http://globalstudiesconsortium.org/tokyo-2008>)。その際に私は、「脱西洋中心主義的なグローバル・スタディーズはあり得るか」というタイトルで、つぎのような内容の講演をしました。

民族医学、民族音楽学など「ethno（エスノ＝民族）」がつく言葉があります。欧米の外側に住む人たちがいる分野について持つ知識の体系、あるいは西洋の学者によるその研究を意味します。これに対して「エスノ」が付かない学問、たとえば医学、音楽学などは、すべて西洋でつくられました。普遍性があるとして「エスノ」を付けません。

その一分野として普遍性を標榜してきたのが人類学です。しかし、それも実は西洋の「エスノ人類学」なのではないかというのが私の考え方です。西洋が培ってきた概念や言語で他者を理解しようという学問である以上、どうしても西洋の価値体系というバイアスから逃れられません。もちろん近代西洋は単一民族ではありませんが、科学主義的な合理性に価値を置く点で共通しています。

どの研究者も、自分の背景に基づいて学問を形成しています。現代日本に生まれて日本とアメリカで教育を受け、メキシコで都合5年ほど暮らしてきた私には、私なりの人類学の根拠があります。「非西洋圏の近代社会」の研究者は、自分のなかの多様なバックグラウンドを意識することによって、脱西洋中心的な学問が可能になるかもしれません。私は、決して反西洋を唱えているわけではありません。近代西洋の科学主義も含めた複数の視角を併走させることが必要だということなのです。

「エスノ人類学」と同じように、いまのグローバル・スタディーズは欧米中心の歴史観にもとづく「エスノ・グローバル・スタディーズ」ではないかというのが私の視点です。「エスノ」と「グローバル」が並ぶと矛盾して見えますが、学問という営為はつねにこの矛盾を抱えているのです。このことを意識して研究者としての自分の足元に目をむけ、自分のなかの複数の視点を対話させながら、人の言葉や行動の背後に共感の可能性を探していかなければなりません。最初のアメリカ人学生の話に戻りますが、複数のselvesを意識することが研究者には大切なのです。

## 近代日本語で世界を考える

私は社会学研究科の地球社会研究専攻に所属しています。この専攻では、グローバルな事象に対し、いかに脱西洋中心主義的なアプローチが可能かを模索しています。その点が欧米系の教育研究機関とは違っています。また、講義、ゼミ、院生の論文執筆が主に日本語で行われている点も特徴的です。留学生に対しても原則として同じ教育方針です。授業をすべて英語でやったほうがグローバルだという声もあるかもしれませんが。しかし私たちは、「非西洋圏にある近代社会」日本の言語でグローバルな課題を考え抜くことに、同じような歴史的運命をたどってきた世

界の多くの人々と対話する糸口があると考えています。学生は欧米言語の文献を山のように読みますし、海外の学会で発表も重ねていますが、英語だけで学問を作るのではもったいないのです。

地球社会研究専攻は、英語では「グローバル・スタディーズ」を名乗っていません。「スタディ・オブ・グローバル・イシューズ」と呼んでいます。それは、さまざまなグローバルな事象にどうアプローチするかの手法が大事だと考えているからです。最初から「グローバル・スタディーズ」という確たる分野と手法があると前提してしまうと、それに縛られ不自由になる恐れがあるからです。

私たちがグローバルな課題に取り巻かれていることは否定できません。それを既存の学問分野のなかで分析するか、別の視点からアプローチを試みるか。どちらも可能ですが、地球社会研究専攻の場合は、ひとつひとつの事象に複数の光を照射し、その全体を把握していくことを重視しています。

## ゼミや授業で養うのは 相手に通じる言葉を生む3つの精神

ゼミや授業には、さまざまな専門、関心を持つ学生が集まっています。したがって、ほかの人にも通じる説明ができるかどうか重要です。たとえ研究テーマが異なっても、共通点は何かを考え、自分の思考を相手に伝え共感を得ようとするのが大切です。そのために必要なのがサービス精神、フェアプレー精神、スポーツパーソン精神であり、それらを培おうというのが授業やゼミの根本的な考え方です。それは、社会に出たあとでも同じ重要性をもつはずで

ニューヨーク・ハーレムのイスラム教徒のアフリカン・アメリカン、スイスの亡命チベット教徒、戦後日本の米軍の音楽など、学生の研究テーマは多様です。だからこそ、地球社会研究専攻に集う学生のテーマがグローバルな問題としてどのように共通しているのか、その視点をシェアすることが重要なのです。(談)



社会学研究科教授

落合一泰

Kazuyasu Ochiai

1997年より社会学研究科地球社会研究専攻教授。文化人類学専攻。  
『マヤ古代から現代へ』(1984)、  
*Quando los Santos Vienen Marchando* (1985)、  
『ラテンアメリカン・エスノグラフィティ』(1988)、  
*Meanings Performed, Symbols Read: Anthropological Studies on Latin America* (1989)、  
『異民族へのまなざし—古写真に刻まれたモンゴロイド』(編著, 1992)、  
*Femaleness in Culture: Some Inter-facial Japanese Studies* (1996)、  
『ラテンアメリカを知る事典』(編著, 1999)、  
*El Mundo Maya: Miradas Japonesas* (編著, 2006) など。